いそがしいお母さん

平成三年度　六年女児

私のお母さんは、看護婦をやっています。夜家に帰ってくると

「つかれだー。」と言って、二分程休んでから、すぐ夕食のしたくに取りかかります。

お母さんが帰って来る時刻は、早くて午後六時ごろで、おそい時は八時ごろにもなります。夜勤や深夜の時は、午前中は家にいて、午後四時か九時ごろ仕事に行きます。帰って来るのは午前三時か十時ごろです。私は、こんなお母さんの毎日を見ていると、こんなことしてたら体をこわしちゃうじゃないかと時々言いたくなります。

でも、お母さんは、

「今の仕事やめたら、あんた達を育てていけないでしょ。」

と言うので、私は言おうにも言えません。少し前に、お母さんが具合が悪くなって寝こんだことがありました。きっと働き過ぎてつかれたのだと思います。その時はあまりひどくはならなかったのですが、それ以来、「また具合が悪くなって死んじゃったらどうしょう。」といつも思っています。だから、少しでもお母さんを楽にさせてあげたいと思っています。

ある日、お母さんが顔色を悪くして帰って来ました。お母さんは私に、

「顔色悪いんでろ。」と聞きました。私はうんとだけ苔えました。でも

「お母さん、また倒れるんだろうか。」と心配でたまりませんでした。その次の日、お母さんは夜勤でした。私はお母さんに、

「仕事休めば。」と言いました。お母さんは、

「でもそう簡単に休めないでしょ。」と言いました。私は、大人の仕事というものはそんなに大事なのかと思いました。

夜勤明けの朝、お母さんは無事に帰って来たのでホッとしました。つかれを取るため、お母さんは二階で寝ていました。ところが、兄と弟が来て、部屋で暴れ出しました。

私は「何という人間だ。」と思いました。二階でお母さんがつかれて寝ているというのに、そこに聞こえるような音でガタガタ暴れているのです。私はすごく頭に来て二、三回注意しました。それでもまだ暴れていました。とうとう二階から、

「うるさい。」という声が聞こえて、お母さんが下へ下りて来ました。この時私は、お母さんにすごく悪いことをしたような、とても残念な気ちになりました。兄や弟に、もう少し家族を思いやる気持ちがあれば、お母さんはゆっくり体を休めることができたはずです。私は「何で自分はこんなに力がないんだろう。」と、自分に対してもつくづく情けないと思いました。

次の日は日曜日でしたが、お母さんは病院から呼ばれて仕事に出かけ、家には、私達兄弟と父だけになりました。お母さんは、私達が眠ったころ帰って来たようです。翌日の朝起きると、眠たそうに階段を下りて行きました。

学校は日曜日とか祝日とかが休みだけど、病院で働いている人達には、ほとんど休みがありません。正月でさえもお母さんは夜勤で病院に行ってしまいます。

お母さんは、

「仕事やめっがな。」と時々言うけど、あんなに大変な思いをしても続けているところを見ると、「本当は今の仕事が好きなんじやないかな」、と思います。もらろん、それだけじゃなくて、私達のために働いてくれているのだから、私達も、お母さんのために何かしなければいけません。大きくなってからではおそいので、今からできることで、少しでもお母さんを楽にしてあげたいと思います。